織田作之助講演会「文学への誘い」の印象

野中寛子

柳吉、蝶子の大阪弁の掛け合いに男女の機微を描きこんだ織田作之助の「夫婦善哉」だが、昨年この作品に続編が存在したことがわかった。さらにおどろくことに、その舞台が大分県別府市となっていたのだ。続編発見のいきさつはこのようなものだ。「戦前に隆盛を誇った出版社『改造社』を創業した山本家が九九年、改造社関係の大量の生原稿を出身地の鹿児島県川内市（現・薩摩川内市）へ寄贈、『まごころ文学館』にて公開中。紅野敏郎氏（早稲田大学名誉教授）らの研究グループがこれら資料の内容を調査し、その中より織田作之助の『続夫婦善哉』二〇〇字詰め九十九頁の原稿の存在が確認された。これまで『続夫婦善哉』の題名と冒頭が書かれた草稿一枚は大阪府立中之島図書館の織田文庫が所蔵していたものの、作品全体の本文は確認されていなかった」（雄松堂広報誌 Net Pinus 六八号　二〇〇七年六月二五日）。この発見を受け、さる十二月八日、別府大学で講演「心をみつめる 文学への誘い—歿後六十年織田作之助の世界」が開催された。当日は扇山から寒風が吹きおろす中、大分県内外より多くの方々が聴講に訪れ、盛況のうちに幕を閉じた。今回講演していただいたのは五名、それぞれの分野のオリジナリティが生かされ、彩り豊かな内容となった。

一　平野芳弘「オダサクの歩んだころの別府」

まずはじめは平野芳弘氏、別府の昭和の文化にまつわる展示が充実した平野資料館館長のご講演である。平野さんは三十五年にわたり明治から昭和初期の別府関係の資料を収集、展示されている。今回は当時の写真をパワー

ポイントを活用しながらスクリーンに映し出し「続夫婦善哉」と同じ時代の別府を案内していただいた。

作之助には「夫婦善哉」と同じく別府を舞台にした「放浪」「雪の夜」「湯の町」などの小説がいくつもあり、別府にゆかりの深い文学者だ。作之助は別府流川通りに、道頓堀「とんぼり」をなつかしく感じていたという。別府という土地は明治から昭和にかけて東洋のナポリ、別天地といわれ、多くの文学者が訪れた。文芸、文化の先端を行く場所だったのだ。また電信電話局、京大地熱発電所といったすぐれた建築物も次々と建てられている。ところで、夫婦善哉の柳吉、蝶子のモデルは作之助の実姉である山市千代と、その夫乕次だといわれている。その千代、乕次は大阪から別府に移り住み「続夫婦善哉」で描かれたように商売を始めた。その場所が竹瓦温泉のすぐそば、今では中華料理の店「一二三」というこぢんまりとした店だ。そしてその路地をはさんだ向いにあるのが平野資料館。ちなみに鉄腕稲尾投手の実家もそのすぐそばにある。作品では、流川に店をだして商売を大きくすると書かれている。当時の流川と今の写真を比べてみよう。かつての流川通がどんなに賑やかだったかがわかる。特に夜の流川はにぎやかで、当時のバスガイドが流川通りを説明するときには、「ネオンの流川」「不夜城」という文句がおきまりだったという。作之助の小説に多く登場する「ビリケンホテル」の写真も残っている。このホテルはもちろん大阪通天閣のビリケンさん—足の裏をさすると幸運が訪れることで有名なあのビリケン人形にちなんでおり、大阪と別府の深いつながりを感じさせる。また、別府の中浜地蔵尊、楠銀天街、法善寺横町の写真をみれば、大阪と別府の風景に多くの共通点があることがわかるだろう。さらに「続夫婦善哉」の場面をなぞりながら、小説のシーンが蘇るようなセピアカラーの写真を次々に映し出していただいた。柳吉、蝶子が流川で旅館経営にのりだす場面にあわせて、昭和初期の流川のよろずや旅館の写真。別府港で信一を見送る場面にあわせ、当時の別府港から黒煙を上げながら進む船、その見送りの群衆が紙テープを手にした写真などである。さいごに作之助の「別府小唄」に描写されている「別府行進曲」という昭和歌謡の貴重なテープを聞かせていただ

きながら、平野さんご自身が撮影された別府湾の夜明けの写真でお話はしめくくられた。

二　重岡徹「織田作之助と別府」

別府大学からは、重岡徹教授による作品世界についての講演をいただいた。重岡先生は別府に来られて四年、オンパクで人気の流しの「ハッチャンブンチャン」路地裏散歩などにも早速参加されたそうで、「続夫婦善哉」ゆかりの竹瓦温泉界隈の独特の雰囲気もすでにご存じのようだ。

柳吉、蝶子のモデル山市弔次、千代夫妻が別府に移住したのは昭和九年九月（または年末とも言われる）。大阪で道路拡張工事のため「サロン千代」の店舗が立ち退きの憂き目にあい、別府への移住を決めたという。なぜ別府が選ばれたのか。明治六年に別府大阪間の航路が開通したことが主な理由だろう。昭和初期にはすでに別府は関西圏の人々にとっての奥座敷としてなじみ深い場所になっていた。別府に移ってからの山市夫妻は、はじめ剃刀、化粧品、電気器具などを商った。そして千代の働きのお陰か、五年後の昭和十四年には割烹「文楽」、さらに十年後の昭和二十四年には別府駅裏で旅館「文楽荘」を経営するに至る。千代と作之助はとても親しい仲で、作之助が姉を訪ねて別府を訪れたのは三度にも及ぶ。その後、昭和三十二年に弔次が死去、千代は竹瓦温泉の路地で甘味と酒を出す「夫婦善哉」、昭和三十四年にはその隣に「バー・タデ」を営みつつ暮らしたという。その後の千代の足取りについては不明だ。昭和四十八年ごろ亡くなったのではという噂もあるのですが・・・と重岡先生がお話されたとき、会場から挙手があり興味深いお話をいただいた。新別府病院で看護師として勤務されたご経験を持つ女性で、昭和四十八年ごろ、千代さんは糖尿病のため新別府病院に入院していたという。その前は病院の近所でお店を開いていたとのこと。看護師としてじっさいに千代さんの治療に当たり、よくお話されたという。しかし異動で病棟が変わり、千代さんの最期は残念ながらご存じないとのことだった。

小説の完成度を続編と正編で比較すれば、「正夫婦善哉」のほうが小説としてはたしかに整っている。しかし

ながら「続夫婦善哉」から読み取れる別の角度からの魅力も多い。続編で作之助は「事変」を信一の出征や刃物の統制で商売が立ち行かぬさまとして描きこんでいる。しかしその酷薄な社会状況を作之助は単なる風俗として描く。正編で大阪の街なみや食べ物、文楽などの風俗が描かれるのと同列に「事変」を描いている。作之助の眼中に戦争などは映らず、戦争だけが特化されることはない。それが「続夫婦善哉」の凄さといえるだろう。またそのまなざしは、「近距離」「中距離」「遠距離」という吉本隆明の言葉で説明できる。一般的に文学者のまなざしは近距離プラス遠距離の両者だが、作之助の特異な点は近距離プラス中距離のまなざしで対象をつかむ点だ。また作之助と千代の関係は姉弟なのだが、この関係は夫婦や恋人といった異性間のハードな関係とは異なり、緩やかで永続的な「対幻想」が形成される特徴がある。このちょうどいい距離感からくる一種の甘さが、柳吉蝶子夫婦への絶妙な距離感を基にした本作品の完成度の高さにつながっている。作之助は敢えて小説の骨組みを壊してまで、柳吉蝶子夫婦に甘い甘いハッピー・エンドを与えているのだ。こういった小説の枠を壊してまで描かれる過激な甘さこそ、この続編の好さと言いうるのではないか。

ここで五分間の休憩。その間にも大阪の織田作之助研究会、オダサク倶楽部によるオリジナルビデオの上映と、「夫婦善哉」他、作之助の初版本が壇上のテーブルに聴講者が自由に閲覧できるよう展示された。

三　井村身恒「大阪ルネサンスの旗手」

休憩後はこのオダサク倶楽部仕掛人、第五回なにわ大賞準大賞受賞という興味深い肩書きの持ち主、井村身恒氏のお話である。この「オダサク倶楽部」は大阪で活動する織田作之助研究会だが、井村氏曰く「織田作をダシに、いろいろ面白いことをやっていこう、ついでに大阪の町ももっと面白くなったらいいんじゃないかと。そういうオダサク主義でやっています」。この「なにわ大賞」とは大阪弁で言う「いちびり」に贈られる賞。「なにわ名物開発研究会」が主催、毎年七月に贈呈式が行われている。井村氏は堺東高校教諭・関西文学会会員を務める

傍ら八〇〇人を動員した「オダサク映画祭」の実行委員長を務め、第五回なにわ大賞の準大賞を受賞した。ところでこの「いちびり」の語源は「市振」。せり市で値の決定を仕切ること、または人のことで、転じて周りを巻きこんでにぎやかにする人のことだという。この「いちびり」は織田作之助の精神とも通じており、これを継承して楽しんでいこうという趣旨のもとオダサク倶楽部を発足させたという。

はじめは井村氏の自己紹介を兼ねて、ＮＨＫ大阪に出演されたビデオを上映していただいた。オダサクの肖像そのままのマント姿でのロケで汗だくになったエピソードや、せっかくの駄洒落がカットされてしまったというお話に会場からは笑い声が起きた。その後、所蔵されている作之助の家族写真を見せていただいた。家族写真には蝶子のモデル、千代も写っている。作之助はこの次姉の千代を「ちっちゃい姉(ねえ)」、長姉を「おっきい姉(ねえ)」と大阪弁独特のイントネーションで呼び親しんでいた。写真の作之助はおどけた中にも早熟の秀才といった雰囲気だ。有名なマント姿の写真も「夫婦善哉」に描かれた大阪の下町情緒のイメージとは異なるモダンな姿だ。作之助の内面にもそのとおりモダニスト的な部分があった。そうした彼の思想を示す文章がある。戦後、焼け跡となった大阪に立って新しい大阪のすがたを見ようとする「永遠の新人―大阪人は灰の中」だ。

新しい大阪は平和産業都市、貿易都市としての姿をやがて現わすだろう。けれども、それと同時にもし大阪人が真に今日の新人であるならば、新しい大阪は文化都市でならぬといち早く気づいているはずだ。

そしてこの考えは作之助の絶筆「可能性の文学」へつながっていく。永遠の新人であり続けようとする態度とはなにか。それは進み続け、変化を求め続ける行為そのものだろう。そしてそこに「大阪ルネサンス」を見ることができる。こうして大阪という土地を深く愛した作之助だが、別府に関しても同じ事が言えるのではないか。作之助は「別府の路地裏は大阪と同じ匂い」があると述べている。作之助は「夫婦善哉」が出版されればそれを携えて別府まで「ちっちゃい姉」を訪ねたという。作之助にとっての別府は第二の故郷として存在している。

四　日高昭二「『夫婦善哉』正・続編を読む」

次は鹿児島の「まごころ文学館」で「夫婦善哉」の続編が発見されたとき、じっさいに調査に関わられた神奈川大学外国語学部、日高教授のご講演。日高先生ご自身の研究ともかかわりながら、文楽、演劇、映画でも多く上演、上映された「夫婦善哉」の詳細なリストをレジュメでご用意いただいた。異なるメディアを介して発展した本作品のイメージについて考えていくという趣旨のお話だ。

「夫婦善哉」が演劇、映画で上演された回数は相当なもので、今ある「夫婦善哉」の認知度の高さは、ほとんどこういった演劇や映画、テレビへの加工によって流通した結果だとさえいえる。また作之助もラジオドラマの脚本を書いており、「夫婦善哉」は積極的に演劇、文楽、映画に変換されていったふしがある。原作においても柳吉蝶子は頻繁に義太夫をうなり、その歌の哀感が作品を効果的に彩っている。そのためか関西ならではの文楽の脚本としても「夫婦善哉」の人気は高かった。演劇ではさまざまな役者が入れ代わり立ち代り柳吉蝶子を演じて批評も活発に行われた。当時の劇評を読むと役者の個性、演出によって物語が原作から離れながら独自の変化をとげていく様子がわかる。その中で森繁久彌と淡島千景のはまり役という評価があるのだが、本作品が豊田四郎監督によって映画化されたとき、この二人の役者がそろって起用され、柳吉蝶子を好演した。この豊田監督の映画「夫婦善哉」は、原作の人物像の関係をもっとも近いかたちで表現している。すなわち生活力のない「ぼんぼん」だが飄々とした柳吉と、陽気でやり手だが一途な蝶子の、被虐と加虐を含んだ「ちょっとへん」な関係を絶妙に描きえているのがこの映画なのである。また、豊田四郎は「夫婦善哉」から昭和三十年代だけをピックアップしても谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」、川端康成「雪国」、志賀直哉「暗夜行路」、永井荷風「濹東綺譚」他、文学作品を原作とする映画を多く手がけている。その中でも映画「夫婦善哉」は最も優れた作品といえるだろう。とはいえ、映画に加工されたものを観ることと、テキストで読むこととの違いというものが当然ある。原作「夫婦善哉」のテキストは情緒から生まれた二人の恋

と欲を語っていくが、徐々に二人の恋愛をとおして社会の規範や枠が逆照射される組み立てがなされていることが特徴的だ。それはたとえば八卦見、法善寺の縁結び、水掛不動に願掛けする場面、猫の糞と明礬を調合する民間療法をためす場面などの習俗の描写から見えてくる。二人は社会の規範の中で違和を感じているものの、習俗と密着するほかない。社会の規範に外側から締め付けられつつ、非力な「願掛け」によってもがく夫婦の姿を描くことで、二人を締め付ける社会規範を浮き彫りにしているのが原作の特徴である。以上のように「夫婦善哉」は、さまざまなメディアによってイメージを拡散させていくという現象がおきた作品だが、さらに続編の存在によって、今後もそのイメージの形は変化していくのかもしれない。

五　浦西和彦

「織田作之助『二コ狆先生』を中心に」

最後は関西大学文学部、浦西教授のご講演。浦西先生はご自身の学生時代に、当時さかんに開催されていた百貨店の古書市で織田作之助の「可能性の文学」と出会い大きな感銘を受けられたという。思い出のエピソードを冒頭にすえ、書誌作りを得意とし、収集家でもある浦西先生ならではのお話を、当時の雑誌広告など貴重な資料を交えながら聞かせていただいた。

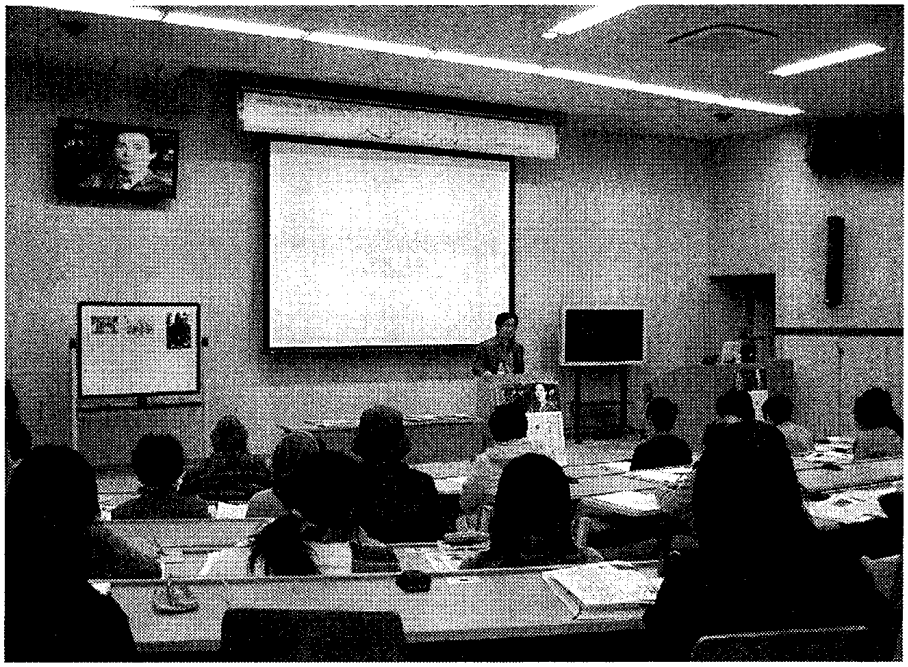
「可能性の文学」で作之助は将棋の坂田三吉に言及している。六八歳の坂田はベテランらしからぬ定跡を逸した無謀な将棋をうった。そのかつてない独創的な手筋を作之助は高く評価したのだ。そしてその対極にある文壇における老大家の「無気力なオルソドックス」に作之助は失望しており、そこから戦中に書くことをしなかった志賀直哉への批判へと筆は進められる。そのころの作之助の動きをたどると、上京という転機が存在している。読売新聞（当時、大阪読売はなかった）に請われ上京、「土曜婦人」を新連載したのが昭和二十一年十一月。翌年の秋に座談会に坂口安吾、太宰治とともに出席し、新しい文学の担い手という自覚が形を現しはじめる。この座談会後、徹夜で執筆したのが「可能性の文学」なのだが、そのわずか一ヵ月とすこしで作之助は結核によって客死

する。これをさかのぼること昭和十五年十二月、内務省図書課と警視庁検閲課は事後検閲を事前検閲へ改め、以降は情報局の圧力が強まる。「夫婦善哉」が『海風』に発表されたのは昭和十五年四月。「夫婦善哉」発表直後から言論統制がとくに峻烈をきわめはじめたことがわかる。それだけでも「続夫婦善哉」の発表がたいへんな困難だったことは容易に想像がつくだろう。

「ニコ狆先生」（昭和二十年一月七日『週刊毎日』）もそのような戦争も末期の厳しい状況下に書かれた。「笑ってはいけない。私はヤブ睨みである。このたび感ずるところあってニコ狆先生の門弟となった。ニコ狆先生また の名を狆クシャといい、甲賀流忍術の達人である」という一文から始まる本作品は、犬の狆クシャに似た「ニコ狆先生」がくりひろげる一見面白おかしい短編である。作之助は、ニコ狆先生が風貌をからかわれ、次第に暴力的になっていく様子を突き放したユーモアで描く。そこには作之助の痛烈な批判精神が潜んでいる。次々に登場するのは「ニコ狆」の「ちん」と語呂合わせしたナンセンスな人物だ。「沈」痛な男は「沈」の一字のため先生からひどい目にあわされる。「ニコチン中毒のために斃れても」と、忍術で煙草を用いようとすれば翌日からその煙草は配給制になってしまう。けれど実はこの軽妙なドタバタは時局を風刺し、天皇の自称「朕」を暗示しながら挑戦の姿勢を貫いている。坂田三吉の定跡破りの無謀な挑戦と同じ挑戦を作之助は文学の中で貫こうとしていた。文学を国が否定した時代に作之助は果敢に書き続けた、その姿勢に価値がある。

五名のご講演が終わったころにはすっかり日も暮れ、予定時間が繰り下がってややあわて気味の別府大学側の心配をよそに、質疑応答では挙手が相次いだ。各講演で共通したおもいがけぬ別府と大阪のつながりに共鳴して、「浮世小路」という大阪と別府に共通の地名を生かし、大阪別府間の交流を深めたいという最後の質問者のお話に拍手が沸き起こり、シンポジウムは無事幕をとじた。広いメディアセンター四階ホールは講演の熱気で温まり、出口付近でごった返す先生や聴講者の方々の上気した笑顔が印象的だった。

（本学大学院博士後期課程）



※写真提供　大浦一郎様（堺市立中央図書館）